

第4回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成28年9月9日(金)
9時55分～12時00分
旧文部省庁舎2階・文化庁特別会議室

〔出席者〕

(委員) 沖森主査, 森山副主査, 秋山, 石黒, 入部, 川瀬, 塩田, 鈴木, 関根,
田中, 納屋, 福田, 山田, 山元各委員(計14名)
(文部科学省・文化庁) 岸本国語課長, 鈴木国語調査官, 武田国語調査官,
小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第3回国語分科会国語課題小委員会・議事録(案)
- 2 福田委員御発表資料
- 3 田中委員御発表資料

〔参考資料〕

- 1 「国語分科会で今後取り組むべき課題について(報告)」(平成25年2月)において未検討の課題の協議で出された意見の整理(平成28年7月まで分)
- 2 国語課題小委員会における審議スケジュール(案)
- 3 文化庁ウェブサイトにおける「「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」の代表音訓索引」の公開

〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について(報告)

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録(案)が確認された。
- 3 福田委員から配布資料2「福田委員御発表資料」について説明があり, 説明に対する質疑応答が行われた。
- 4 田中委員から配布資料3「田中委員御発表資料」について説明があり, 説明に対する質疑応答が行われた。
- 5 福田委員, 田中委員の説明を踏まえ, 意見交換が行われた。
- 6 次回の国語課題小委員会について, 平成28年10月7日(金)午前10時から12時まで文部科学省第2会議室で開催することが確認された。
- 7 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

御発表に関してですが, 前回は石黒委員と塩田委員に御発表をお願いいたしました。石黒委員, そして塩田委員の御発表については, それぞれ参考資料1にまとめられておりますが, 石黒委員からは, 正解を整理するのではなく, 方法はいろいろとあるという選択肢提示型の指針が望ましく, 社会的な条件や場面などによって決まってくるいろいろな方法の効果と弊害の両方を示し, 最適な解答をそれぞれで考えてもらう必

要があるということ。そして、情報伝達面よりも感情伝達面を重視した話し言葉のコミュニケーションを整理していくには、社会言語学や心理的な距離、社会的な制約、発話機能を中心に考えていく必要があるといった御提案がございました。

塩田委員からは、ある言語表現について、どれが正しい／正しくないではなく、調査に基づいた現在の相場というものがどの辺りにあるかを選択肢として提示し、運用上の問題、感じがいい／感じが悪いの問題を考えてもらえるのが必要であろうという御提案がございました。

本日は、これまでとは違った観点からの御発表を、お二人の委員にお願いすることにいたしました。それぞれの御発表の後に、質疑応答の時間を取り、意見交換はお二人の御発表の後にを行うということにさせていただきます。

では初めに、配布資料2に基づき、福田委員から、言語心理学の観点からコミュニケーションの在り方についてのお考えを御発表いただきたいと思います。お忙しい中御準備くださり、ありがとうございます。では、よろしく申し上げます。

○福田委員

御紹介ありがとうございました。法政大学の福田です。

コミュニケーションとは、状況を指したり能力を指したり、いろいろなことを指す概念です。そこで、実際に測定できる概念として、本日はコミュニケーション能力ということでお話をしたいと思います。

内容は、資料にあるように二つに大きく分けてありますが、最初に、コミュニケーション能力とは何かということをお話ししたいと思います。私が考えるコミュニケーション能力とは、他者、あるいは客体化した自己と共有した世界を構築するための道具を使いこなす力と、このように仮に定義をしたいと思います。

では、この共有した世界とは一体どういうことなのかということですが、失敗した事例を出すことによって明らかになると思いますので、まず御覧ください。これは4コマ漫画です。

楽しいデートだったんですが、最後の4コマ目では余りいい雰囲気ではなくなっています。この二人は一体何に失敗をしてこんなことになってしまったのか。このことを見るために、2コマ目を御覧ください。彼女は、コーヒー屋を見えています。一方彼は前を見ている、コーヒー屋を特定できていません。今話題になっている対象の共有が二人の中でできていません。私たち人間の目はビデオカメラとは違って、注目や、注意をしている事柄だけしか、情報は頭の中に入ってきません。一方、会話をするためには、話題になっている対象を共有しなければなりません。その共有したい対象に注意を向けさせるためには、例えば言葉を使うとか、あるいは指を指すなどの非言語的行動とかをうまく使わなくては成り立たないということになります。そして、4コマ目を注目していただきたいと思います。4コマ目では、かなりうまくない状況になっているんですが、彼女のセリフに注目してください。「パン一緒に食べたでしょう」というのは、過去のこと、思い出の話をしています。彼が彼女の思い出を忘れていて、つまり、自分のことを軽んじていると思って怒っているわけです。この状況では、2コマ目で自分が言った、パン屋がコーヒー屋に変わったなどということは思考の外になっています。一方、彼にも言い分はあり、思い出にもたくさんあるから、ちゃんと言ってくれないと分からないじゃないか。このように、過去のことを共有するためには、残念ながら指を指すなどということではできないので、言葉しか使えないということになります。

二人はコミュニケーション能力を発揮できなかったために、険悪なムードになってしまいました。このような失敗例から考えると、コミュニケーション能力の定義というのが明確になるのではないのでしょうか。つまり、コミュニケーション能力とは、他

者、あるいは客体化した自己と全ての時間軸、現在だけではなくて過去、そして未来の、共有した世界を構築するための道具、ここで明らかになったのは、言葉や非言語的行動を使いこなす力ということになります。

今回の国語課題小委員会で、この客体化した自己を取り上げるかどうかというのは、結構難しいと思います。客体化した自己というのは、思考を念頭に置いています。しかし、コミュニケーションというのは非常に広い話なので、シンプルにするために、今回の発表では他者だけを対象にしたいと思います。また、道具のところに非言語的行動というのにも入っていますが、こちらの方は、先ほども過去の共有の失敗でお話したように制限があるので残しておきますが、基本的には言葉を中心に考えたいと思います。

もうちょっとシンプルな形で、コミュニケーション能力を、配布資料2のスライド7のように仮に定義付けたいと思います。この仮の定義に基づいて、話を進めていこうと思います。

次に、コミュニケーション能力を支えている道具としての言葉について、もう少し詳しく見ていきたいと思います。道具としての言葉を使って、共有される内容は何かと言いますと、まずこのスライド8では、発信者と受信者の内容が一致している例を挙げています。もちろん知識というような情報も共有されます。そして、感情というのも一つの情報だと思います。この場合は、発信者が悲しいという気持ちを表現して、受信者が、ああ、悲しいんだなという、同じことを共有していると言えます。一方、受信者の内容と発信者の内容が異なる場合もあります。次のスライドでは、そこを指しています。最初に、例えば発信者は第一親等の男性を示すつもりで「パパ」という言葉を使った場合に、受信者の側では、「パパ」、いい年をした大人が他人に向かって「パパ」というのはちょっとねというような、あるいは甘えた感じがするといったようなネガティブな感情が喚起されると。先ほどは感情が伝わるというお話だったんですが、今回は喚起されることになり、ノットイコール(≠)であるという例を出しています。

また、情報の伝達を意図しないような、そんなコミュニケーションもあるんじゃないかと思います。一緒に月を見ている恋人たちをイメージしてください。月を見ているのに、月が出ているというのは、情報としては無価値であると。それにもかかわらず、「月が出ているね」ということを言って何があるのかということ、受信者の方は、一緒にいてうれしいなとか、そういう気持ちの共有、同じものを見ていいなという、愛情がどんどん深まっていく、そういったものを目的としたコミュニケーションもあるんじゃないかと思います。

さて、言葉には、話し言葉と書き言葉があります。今までの例は、主に話し言葉を紹介してきました。では、書き言葉ではコミュニケーションできないんでしょうか。もちろんそんなことはないと思います。物語を読んでいるときに、その世界に没入してしまうという体験は皆さんお持ちなのではないでしょうか。つまり、作者が作り上げた物語の世界を読み手が理解して、さらに自分の知識を加味しながら、本を通して共有された世界ができるわけです。つまり、情報とか知識といったものや、感情といった情報は伝わるし、感情も喚起するわけです。この共有された世界は、読み手が元々持っている知識や関心などによって、同じ作品を読んでも、違った共有された世界が出来上がります。また、作者の力量によっても、共有される世界は異なりますし、世界の構築のしやすさも、作者の力量によって異なります。

スライド12は、ある公的機関によるお知らせです。公文書と言われるものの一つだと思いますが、こういうお知らせをもらおうと、表彰されなくてもいいやというような気分になりませんか。一方、手続を流れ図のような形で表すとどうでしょうか。ああ、自分はこれに該当するな、じゃあ表彰してもらおう、うれしいなとなり、市役所に行

こうという気にならないでしょうか。左側の文章は、分かりやすそうには書いていますが、読み手と共有したいというような意図が見られません。読み手は、共有した世界を構築できないということになります。一方、右側は、簡単にできる。つまり、読むだけではなく、書く場合にもコミュニケーション能力というのは必要になってきます。

今の社会は、IT技術の発展によって、マルチメディア化されていると言われていきます。しかし、マルチメディア化＝書き言葉の重要性が低くなっているわけではありません。きっと今まで以上に書き言葉の使用がなされているのではないのでしょうか。また、社会に出ると、様々な文章を作成しなければなりません。しかも相手が上司とか、相手が取引先とかのような、読み手を意識したような文書でなくては、仕事ができないというラベル付けをされてしまいます。先ほどの公共機関からのお知らせというのは、生活に直結しています。地震保険とか、補助金をもらうために、何をどうしたらいいのか、こんな文書では全然分からない。結局、窓口に行って聞くというようなことが起こってしまいます。個人の生活にも書き言葉が多く使われており、つまりコミュニケーションの道具として、話し言葉だけではなくて、書き言葉も使われているということになります。

さて、先ほどの定義ですが、道具としての言葉というところに、話し言葉や書き言葉というのを加えました。つまり、コミュニケーション能力とは、「他者と全ての時間軸における共有した世界を構築するための道具、つまり話し言葉や書き言葉、非言語的行動を使いこなす力」と定義付けたいと思います。

そして、私たちは、社会的動物であり、一人で人生を渡っていくことはできません。生活のどの場にも、他者という存在を考えなければ生きてはいけません。つまり、コミュニケーション能力というのは、全ての生活における基礎能力になります。このような定義で、今回は話を進めさせていただきます。そして、どうしてこんなに定義にこだわっているのかと言いますと、いろいろ困ることが生じると考えるからです。

皆さん御存じの経団連の調査の結果です。11年連続でコミュニケーション能力が求められています。社会に出る最後の教育機関として、大学とか大学院があると思いますが、昨今、学生の確保等で大学の事情が厳しい中で、経団連が就職の選考の際に重視した能力は、コミュニケーション能力だということがニュースで出ると、大学の教育でコミュニケーション能力を付けて就職に有利な学生を送り出そう、有利な大学だと宣伝しようという雰囲気になります。しかし、経団連が考えているコミュニケーション能力って一体何でしょうか。それらを区別しないで、引っくるめた調査を行っているわけです。その結果に振り回される学生はかわいそうだし、さらにそれに振り回されている大学、大学教員も悲惨な状態です。したがって、この国語課題小委員会でコミュニケーション能力の定義を明確にすることができれば、こんな曖昧な調査項目は精査されて、本当に企業に求められている能力とは一体何なのかということが分かるんじゃないかと思います。

この国語課題小委員会で検討することとして、二つを提案したいと思います。まずはコミュニケーションの定義です。今回の発表では、コミュニケーション能力ということに絞って考えました。なぜ能力にしたかというのと、この②を考えるのに、考えやすいと思ったからです。つまり、コミュニケーションをより良く実現するための方策の提示をするためには、漠然とした状況ではなく、こういう能力を持っているということが分かりやすいかと思ったわけです。しかしながら、ここでの審議に、その方向性は委ねたいと思います。

②ですが、方策を提示しますが、いい／悪いということだけではなくて、考えてもらうための指針、自分のコミュニケーション能力をどうやって上げるのか、あるいはコミュニケーションの場をどう気持ち良いものにするのか、そういったことを考えて

もらうための指針として仕上げたらよいと思います。具体的には、自分自身の言語能力や非言語的行動の使いこなしを上げ、そして、コミュニケーションなので、必ず他者がいますので、他者意識を持つ、つまり、共有することが目的ということの意識化というのが重要なのではないのでしょうか。

コミュニケーションは、発信者と受信者がいますので、具体的により良いコミュニケーションの実現のために、まずこの二つに分けて考えていきたいと思います。必ず誰かと誰か、もちろん複数でもいいですが、発信者と受信者の相互作用で行われている。それぞれの立場から、より良いコミュニケーションとは何かということを考えていきたいと思います。

最初に、発信者側のことについて考えていきます。受信者にとって分かりやすいコミュニケーションをするにはどうしたらいいのかということです。

話題に関する知識。コミュニケーションには、必ず話題・テーマがあります。それに関する知識は、もちろん多い方がいいでしょう。それにより、相手に合わせた言い換え可能な語彙がありますし、表現もできる。話し方も工夫ができるのではないのでしょうか。

受信者に関する知識。これも、分かりやすいコミュニケーションにとっては重要です。ここには十年齢などと書いてありますが、「ワーキングメモリ容量」、「処理能力」というのは心理学の用語なので、ここでは一番研究が進んでいる、読みの研究を使って説明したいと思います。なお、話し言葉でも同じことが生じていると考えられています。ただ、対面している場合には、その都度確認できることが多いので、読むことよりも聞くことの方が簡単と考えていただければと思います。

文章を読む際のことを考えてください。最初にしなくてはいけないことは、もちろん単語の処理です。頭の中に辞書のようなものがありますが、そこにアクセスをして、意味を抽出します。これが語彙力と言われるようなことです。そして、単語の処理ができれば、今度は一文を処理します。これに関連するのが構文解析力です。これらの能力は、言葉に関連する能力と言えます。それだけでは談話や文章全体の理解は終わりません。文章全体の理解をするとき、読み手は自分が既に持っている知識を利用しています。それを既有知識と呼んでいます。

例えば、野球の実況の文を読んだり聞いたりした場合をイメージしてください。「一回裏の攻撃です。一番打者がシングルヒット、二番打者が送りバントを成功させました」という文章自体は誰でも理解できると思います。しかし、野球をよく知っている人だったら、「ああ、今ワンアウトでランナー二塁にいるな」ということが推測できます。一方、野球を知らない人は、分かっても推測はできないということになります。このように、文章全体を理解する際には、読み手の既有知識が影響します。結果的に、状況モデルと言われていますが、ここでのお話だと、共有された世界を作り上げることができるということになります。このような既有知識というのは、言葉に直接関連しているわけではないので、汎用的能力ということになります。

今の説明は、分かりやすくするために一つの情報の流れを主にお話ししましたが、実際に文章を読んでいる最中には、言語情報がどんどん入ってきます。つまり、最初の文を処理している間に2番目の文の単語も目に入ってきます。単語の処理、文の処理、談話の処理などを並行して行っているのが文章を読むということになります。もう少し詳しく情報の流れを見ていきます。例えば、一文の処理を考えてみるだけでもすごいことを我々はしています。文頭の単語を覚えておきながら文を読んでいかないと、一文の理解はできないと思います。このように、処理をしながら情報を覚える過程に関して、うまく説明した概念に、ワーキングメモリというものがあります。ワーキングメモリも、言葉に直結していませんので、これも汎用的能力の一つと言われています。ワーキングメモリについて、詳しく御説明します。

ワーキングメモリとは、情報を処理しながら、情報を保持するといった人間の記憶理論のことです。ワーキングメモリのモデル図は、スライド 22 のようになっています。四角で囲まれたところが情報を保持するところです。保持する情報の種類によって、三つの箱が仮定されています。視空間に関する情報は「視空間スケッチパッド」。言語に関する情報は「音韻ループ」。複数の情報源からの情報を統合するのが「エピソードバッファ」。これらの情報は、長期記憶－既有知識と今まで言っていましたが、そこと情報をうまく交換できるような形になっています。そして、これらの情報の保持をコントロール、注意の割当てなどを行っているのが「中央実行系」です。

最初に情報の保持に注目をして、言語能力との関連を考えていきたいと思います。保持能力のことは、ワーキングメモリ容量と言われています。幾つかの課題によって、その容量は測定できます。一番有名なのが、「Reading Span Test」と呼ばれるものです。例えば、このような文を音読しながら、つまり処理をしながら、下線部の単語を同時に覚えてもらう、保持をするということになります。その音読をしながら、処理をしながら、何個単語を覚えていられるのか、保持できるのかということ測定するわけです。そうすると、大体大学生だと四つから五つの単語を覚えていることができます。発達差としては 30 代がピークと言われている、児童・生徒、高齢者の容量は少なくなります。個人差もあります。その個人差に関して、ワーキングメモリの容量に余裕があると、ほかの処理が促進されるということが知られています。

このことを先ほどの読みの処理過程モデルに適用すると、初期の処理では、ワーキングメモリ容量が多い人も少ない人も、読んだ同じ分量だけ処理が要求されます。しかし、ワーキングメモリが多く、余っている人は、余った分を次の談話の処理に使えます。つまり、既有知識、自分が持っている知識と、文章の内容を統合することができ、結果的に豊かな共有された世界、状況モデルが構築されます。このワーキングメモリ容量と読解力は正の相関があることが知られています。

次に、処理を担当している箇所、中央実行系はどう影響しているか考えていきたいと思います。処理能力は、処理資源の多さに影響されます。その処理資源には、例えば石油がたくさんある中東、資源がない日本のように、個人差があります。そして、処理能力に関して重要なのは、自動化された処理は資源が余りかからないということです。例えば、自動化された処理とは、初めて教習所で運転する際、左足でクラッチを踏みながら、右足でアクセルを踏んで、かつハンドルを握って前後左右、注意を振り分けて発車しなくてははいけない。そういうとき、初心者はどうになってしまうのかというと、エンストをしてしまいます。いろいろな動作を一遍に行わなければならない。つまり、注意をいろいろに分けなくてははいけないので、資源が足りなくなってしまうてうまくいかないわけです。一方、クラッチとアクセルの動作に熟達してくると、そちらに注意を向けなくていいので、前後右左を見てスムーズに発進することができるようになります。このことは、動作だけではなくて、認知処理にも同じことが言えます。先ほどの読解過程のモデルで、この処理資源のことを考えてみると、初期の過程の単語の意味にアクセスするとか、そういった処理が自動化されていれば、文の談話の処理に資源を割り当てることができる。そうすると、文章全体の意味や、暗示されている内容などを推測でき、結果的に、豊かな共有した世界が作り上げられるということになります。

以上のことにより、受信者に関する知識を知っていると、相手の年齢やワーキングメモリ容量、処理能力に合わせた語彙や表現を選択できるのではないのでしょうか。例えば、年齢によって理解語彙が異なるということは知られていると思います。そのために、言い換え可能な語彙を発信者が持っていることが必要になります。また、相手の社会的地域に合った言葉遣いも、円滑なコミュニケーションには必要でしょう。例えば、前から話題になっている敬意表現というのもこういうことに当たるのではない

でしょうか。ワーキングメモリ容量に発達差がある。そうすると、幼児は一遍にたくさんの方を言っても分からなくなってしまう。せいぜい二つぐらい。高齢者についても同じです。ただし、お年寄りの場合には個人差が大きいので、それに合わせた語彙や表現法を使うことが求められると思います。

処理能力も同様に発達差があります。例えば、話し方に絞って考えると、重要なところではポーズを取るとか、あるいは大きな声にするといった準言語的な情報を使ったり、前のめりになるとか、腕を広げるといった非言語的行動を使ったりすることにより、重要な情報はこれ、これさえ処理して、これさえ覚えていて、というようなことは伝えることができるんじゃないかと思います。

書き言葉に関して言えば、常体とか敬体とか、あるいはアンダーラインを引く、強調体を使う、大きいフォントを使う、そういったことによって表現できるんじゃないでしょうか。このように、受信者に関する知識を持って、それに合わせた語彙、表現を使うことによって、よりよいコミュニケーションになると思います。

そして、自伝的記憶の構造の利用というのは、自分に関する記憶のことです。ウクライナの首都はキエフなどといった記憶よりも、鮮明で忘れづらく思い出しやすいという特徴を持っています。その自伝的記憶はテーマ別に、ここでは関係性のテーマ、仕事のテーマみたいな形で情報がまとめられ、体系化されている。時期とか一般的な出来事、そしてその出来事の細部がいろいろ詰まっているわけです。

したがって、例えば恋人がたくさんいるようなA君は、デートという出来事の細部がたくさんある。Bさんと見に行った映画デートの細部とCさんとのデートをごちゃごちゃにしてしまっていて、疑義が起こってしまいます。

これを使ってみましょうということですが、先ほどの4コマ漫画を思い出してください。彼女の言い方はこうでした。「前に食べたパンだよ」とか「おいしかったじゃない」。これは彼の記憶を呼び起こしづらい例だと言えます。そうではなく、場所や時間の言及とか、そのときの感情とか、イベントが何だったのか、思い出しやすいようにしてみる。例えば、「球場に持っていったパンでさ、あなた、カスタード好きでおいしくて言ってたよ。」とか、「ホームランが出たじゃない。」、そのようなことを付け加えることによって、記憶を呼び起こしやすくなっていくということになります。つまり、受信者の自伝的記憶を利用して、うまく引き出していく。そういうことによって、分かりやすいコミュニケーションができるのではないのでしょうか。

最後に、記憶の確認ということですが、もちろんこれも必要だと思います。相手がきちんと自分の伝えていることが分かっているのか、様々な方策で探っていかなければ、次の話には進めない。その言い方も、「分かったあ？」なんていうようなことを言ったら、多分反感を買うんじゃないでしょうか。つまり、発信者が他者意識を持って臨むと、いろいろな言い換えとかができるようになって、円滑なコミュニケーションが取れるのではないのでしょうか。

では、受信者側はどうでしょうか。発信者による情報や感情をよりよく理解するために、やはり同じような内容、似たような内容ですが、受信者も持っていた方が、あるいは活用した方がいいと思います。発信者と同様に、話題や発信者に関する知識が必要でしょう。また、書かれている、話されている話題に関して推論しなくては、豊かな状況モデル、豊かな共有された世界はできないわけですので、そういったものも必要です。そのためには自分の知識を増やしたり、推論力を高めたりすることが良いと思います。

また、メタ認知能力—自分がどこまで分かっている、どこまで分かっているのかということも活用しなくてはならないと思います。そして、言っている意味が分からないならば、メタ認知能力を働かせて、自分はどこまでしか分かっている、ということが起こったときにどうするのか。何言っているか分からないとかと言って膨れ

るのではなくて、「すみません、よく分からないんですが…」と尋ねたりとか、「○○とはこういうことなんですか。」といった確認を入れたりとか、書かれているものだったら自分で下線を引いてその言葉を調べる、あるいは表現を調べる、そんなことができなくては、共有された世界は作れないということになります。そうすると、対処法としてどんな表現を持っているのか、あるいは、援助の模索ができるのかどうか—直接本人に聞かなくても、他人に聞いてもいいわけですし、ネットで検索してもいいわけですよ—そういう方法をちゃんと自分の中に持っていて、実際に使えるのかどうかということが重要になってきます。受信者も実はすぐに発信者になっていくわけです。どちらが一方の役割だけを担うということはないということになります。つまり、受信者側も他者意識をもって臨むと、円滑なコミュニケーションが取れるのではないかと思います。

他者を意識することにより、先ほどお話ししたような、自分の言語能力や非言語能力を使う能力を上げなくてはならず、自分のコミュニケーション能力が上がることによって、他者を意識した情報や感情の伝達ができるようになり、さらに他者の状態がよく分かる。そうすると、また自分のコミュニケーション能力もアップしてといった、正の相互作用、正のスパイラルが起こっていきます。結果的に、より良いコミュニケーションが実現できるのではないかと考えています。

まとめです。国語課題小委員会で何を検討するのかということに関して、二つ提案しました。コミュニケーションの定義と、コミュニケーションをより良く実現するための方策の提示、この二つです。より良いコミュニケーションを実現するためには、自分の言語能力、あるいは非言語的能力を上げることと、それから、他者意識を持つことになると思います。スライド31の②ですが、どうしてもこうあるべきとなってしまいがちですが、相手の状態をよく考えて、言い換えができるようになるとか、表現を変えていくとか、そういったことのパターンを挙げて、考えてもらう。どうしてかと言いますと、その状況というのは様々あると思うからです。それをここで網羅することはできないし、そのようなことをする必要もないと思います。したがって、例えば状況に応じて使用頻度の高い語彙や表現を調査して、それに合わせた語彙や表現について言い換え可能な例を挙げていく、といった方法があると思いました。

以上、私の話題提供の内容です。御意見、御質問どうぞよろしくお願ひします。ありがとうございました。以上です。

○沖森主査

御発表、どうもありがとうございました。それでは、福田委員による御発表について質問をお受けしたいと思ひます。

○塩田委員

今日来ていらっしゃる方は別ですが、私がよく接している言語研究者は、言語を研究しているのに非常に分かりにくい説明をする方が多いのです。しかし、ものすごく分かりやすく、今日からでも言語心理学を勉強しなきゃならないと思ひております。

言語心理学を知らない立場で、一つ御質問を申し上げます。

コミュニケーションとコミュニケーション能力の定義に関わることですが、例えばいじめの問題、いじめで使われる言葉で、「お前なんか死んじまえ。」という言葉がもしあったとする。私だと素人なので、そもそもそういうことを言うこと自体がコミュニケーション能力が低いのではないかと思ひます。しかし、共有した世界を構築するという考えからすると、言った側の世界が共有されており、それは相手に的確にダメージを与えたという意味で、コミュニケーション能力が高いと見るべきなのではないでしょうか。私は素人として、そんなことを言うこと自体がコミュニケーション能力が低い

のではないかなと思ってしまうので、もしそうだとするならば、今の定義に、「より良い関係を築くことを目的として」というような限定を付ける方法もあるのではないかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

○福田委員

ありがとうございます。この定義だけですと正にそのとおりで、いじめをしようと思って相手にダメージを与えるつもりで言われた「お前なんか死んじまえ。」というのは、コミュニケーション能力が高いということになると思います。

定義に価値を入れるかどうかという話なんだと思います。学問的には価値は余り入れない方がいいのですが、この国語課題小委員会の中では、その部分をどうするかという問題はあります。確かに塩田委員のおっしゃったように、「より良い」ということを入れた方が逆にいいのかもしれませんが。

○塩田委員

私が悩んでいるのは、要するに、コミュニケーション能力というのは、例えそんなことをしてしまったとしても言わないということのもコミュニケーション能力の一つに入るのではないかと考えているところがあるからです。「お前なんか死んじまえ。」も多分そうだと思います。思うことは禁止はできないけれども、思ったとしても言わないようにとどめるという能力、相手と自分の世界をあえて共有させない能力、そういうものも入ってくるのではないかなと思いました。

○山元委員

今のことに関わって。目指すべきコミュニケーション能力と価値の問題なんだと思います。それをちゃんと入れるか入れないかが、学問の趣旨の違いのように、今お話を聞いていて思いました。

学問研究だと、こういうコミュニケーション能力の方がいいんだといったことは入れにくいですね。

しかし、指針を作るということから言えば、そちらは見逃し難いものがあるだろうと、塩田委員の御発言で思いました。でも、それが妥当なものであるためには、やはりアンケートを取り、今の日本の置かれている現状とか、そういったものをしっかり調べて、その共通の理解、納得したものを取るといった手順が必要ではないかと思いました。

○福田委員

多分、他者意識という言葉を使っていると思いますが、そこで、他者配慮みたいな言葉遣いをすることによって、いじめの言葉やヘイトスピーチには配慮はないと言えます。そういったことで、能力とはこうだけれども、より良いコミュニケーションをするためには他者配慮をしたコミュニケーション能力も必要だといった形にするといふのかなと、今お話を聞いていて思いました。

○石黒委員

他者意識の方に話移ってきたのでお伺いいたします。例えば、書いたものを読み手の立場に立って推敲^{こう}できる能力というのは、やっぱり分かりやすく伝えるために必要な力でしょうし、あるいは話す側でも、それは同じように、聞き手がどういうふうに理解するかということのを頭の中でモニターして話していくことはすごく重要なことだと思います。コミュニケーション能力として、スキルのようなものとして、よりそ

れを上げていこうと考えた場合に、他者意識というのは難しいと思います。つまり、究極的には人間って他者のことは知り得ないので、もちろん他者意識といった場合には、自己の中にある他者像みたいなものだと思いますが、他者意識をどう確認できるものなのか、あるいは、他者意識というものを上げていくためには、どのようなトレーニングが、可能であるとすれば可能なのか、お聞かせください。

○福田委員

例えば、医療の現場をイメージしてください。高齢者の方に、お医者さんが説明をする際、お医者さんの持っている知識とおじいちゃん、おばあちゃんが持っている知識には雲泥の差があります。その際、医学用語を使って説明するのは甚だ他者意識が低いと言わざるを得ません。おじいちゃん、おばあちゃんが、お医者さんという分野で生きてきた人ではないということは簡単に推測ができるだろうと思いますし、あるいは生活のことを聞き出すということによってもそれは分かると思います。そのときにどう言い換えができるのかということや、あるいは薬の飲み方に関しても同じようなことが言えるんじゃないかと思います。

薬を10種類ぐらい渡して、書いてあるとおり飲んでねと言われても、高齢者はなかなかできないのではないのでしょうか。では、そのときにどんな方法があるのかと言いますと、今、医療現場では、学生ですが、患者側、あるいはお医者さん側になってシミュレーションをし、診察室を模擬診査の場にするなど、いろいろな工夫をしているみたいです。まだまだ現実にはうまくいかないと思いますが、模擬授業では、多分言い換えをどうするかということを実践しているんだと思います。そのときに、おしなべて患者さんは知識がないものだという前提で始まっていると思います。石黒委員のおっしゃったように、個人差までは多分レジデント（病院勤務研修医）の段階ではうまくできていないけれども、だんだん経験を積むにつれて変わってくるのではと期待はしています。

○沖森主査

それでは、続きまして、配布資料3に基づいて、田中委員から方言の問題を中心に、その機能を視野に含めた社会言語学の観点からコミュニケーションの在り方についてのお考えを御発表いただきます。御多忙の中御準備くださりありがとうございます。では、よろしく申し上げます。

○田中委員

田中ゆかりです。どうぞよろしく申し上げます。

コミュニケーション論ということで、私に与えられた課題は方言についてどう考えるか。それからもう一つは、先ほど福田委員の御発表の中にもありましたが、話し言葉、書き言葉とは別の形でメディアの進展に伴って出てきた、私はこれを「打ち言葉」と呼んでいます。この「打ち言葉」のコミュニケーションといったことが私の宿題だと理解しました。

また、基本的にここまでの話においては、言わばソーシャルな場面、社会的な場面におけるあらまほしきコミュニケーションと、それからパーソナルな場面とに分けられると考えます。例えば先ほどの御発表で行けば、企業が期待するようなコミュニケーションと、それから恋人同士の間で、望ましい関係性を構築するようなコミュニケーションと、どちらかというところ全体としては、社会的な場面におけるコミュニケーションの話をごさすべきだろうと思いました。

私がこれからお話しすることについては、実は社会的な話、全体で言えば社会と関わりますが、パーソナルな話、それから、ソーシャルだけれども、パーソナルさとい

ったことを表現するためのコミュニケーションといったことの話になると思います。また、指針の中にどのように取り入れていくのかについては、私も、さてと思うところが多々あります。方言と言ったときに、皆様の中にそれぞれイメージがあると思いますが、ここにはいろいろな場面で活躍されている方がいらっしゃると思いますので、従来の形での方言とは違うものといったことが多々出てきているのは御存じだと思います。その辺のところでは話をしたいと思いますので、よろしくお願いします。

「「方言」の現在」とかぎ括弧を付けて書いています。これは私がかぎ括弧を付けるのが好きということだけではなく、実は二重の意味が入っています。

方言と言ったときに、その発信者が一体どういう属性を持っているのかといったことを如実に表す言語変種であるということになっています。その人がどこで生まれ育ったのかという地域方言。それから、例えば男性であるとか女性であるとか、若いとか若くないとか、どんな仕事をしているとかといったようなアンケートで聞かれる基本的な社会的属性といったことに基づく、社会方言といったものがあります。今日では、どこで生まれ育ったのかとか、それ以外の社会的なラベルといったもの、これらがこん然一体となっています。つまり地域方言も実際には社会方言化しているのですが、一応ここでは議論のために、地域方言の話をするという意味で、括弧が付いています。

もう一つは、一般的に方言というと地域方言を思い浮かべますが、そのときの方言は、在来の土地の言葉ですから、普通に生活の中で使われている素の言葉としての方言で、どこの誰でも方言を持っているわけです。方言を持っているという意識があるかないか、濃いか薄いかは別にして、みんな方言は持っているわけです。これは在来の土地といったことと、その人の地域に対するアイデンティティーなり何なりといったことと、固く結び付いているものになります。しかし、実はそういったようなものとは固く結び付かない、むしろ解き放たれているようなリアルな生活の言葉としてではない方言も、実は今日は、話の中に含んでいるといった意味で、二重の意味でかぎ括弧を付けております。

さて、ではまず、「国語に関する世論調査」を文化庁で平成7年から毎年実施されています。昨年度までの公開されている、「国語に関する世論調査」において、方言についての設問は、設問タイプとしては4タイプありました。実は方言がメインとなっている主設問というのは2タイプしかありませんでした。一体これは何を意味しているのか。そして、主設問じゃないものとは、ある質問があって、それに対してサブクエスチョン、またはサブクエスチョンの選択肢として出てきているということです。繰り返しなされたものをカウントしてみても、約20年この調査が行われていますが、方言関連の設問は延べ10設問に過ぎません。

具体的にはこんな4タイプでした。一つは、共通語と方言の使い分けに関する設問です。これは意識を聞いています。二つ目が、国語に対して国に期待することについてあるかないか聞いて、あると言った人の中にサブクエスチョンとして、「方言を大切にし、受け継がれるようにすること」というのを選択肢として設けています。三つ目も似ていますが、国語について関心があるかないかと聞いた主設問の後に、関心のありかとして、共通語や方言といったところが選択肢として入っている。そして四つ目。これはすごく新しい問題ですが、2009年にユネスコが危機言語指定をした8言語、方言があるわけですが、その危機言語関連についての設問とサブクエスチョンです。つまり、①～③のグループと、④のグループに大きく分かれます。

まず①～③は、内在的な、つまり日本語社会、大体日本国の中と見ていいと思いますが、日本語社会の中における内在的な方言と共通語の問題です。これは前身の国語審議会で見ると、方言と共通語のことについて取り上げられているのは1954年。これは標準語部会といった名前から分かるように、現在では共通語と言い換えの言葉が定

着していますが、そのときにはまだ必要であると考えられていた時代、つまり高度経済成長以前の問題です。しかし、高度経済成長を経て共通語化が進展して、大体津々浦々に共通語運用能力は広まりました。その間、ずっとこの問題には触れられておらず、90年代になって、第19、20期において、方言も尊重しましょうということが述べられるようになってきています。参考として、21、22期で見ると、方言の問題は終わったということだと思われ、時代の変遷に従って、敬意表現であるとか情報化に伴っての表外漢字であるとか、国際化であるとかということに変わっています。つまり、ここを見ても、国語施策としての方言・共通語問題は、共通語化の普及に伴い、やや終わったトピック化していると受け止めました。

四つ目の問題です。これは危機言語の問題ですが、これは急に出てきます。ユネスコという国際機関からの刺激に端を発する危機言語、方言問題です。これは文化庁のホームページにも詳しく書いてありますので、詳しくはそちらを御覧ください。これは外からの刺激を受けることによって、急速に現在の国語施策でトピック化してきている問題です。方言については、以上2個で、一つは終わった感じ、一つは外からの刺激によって、今盛んに取り組まれている、いい傾向のもの。こうした問題があるということです。

さて、余り比べられる項目がありませんが、一応比べられる項目としては、共通語と方言の使い分けについて聞いている調査が、平成7年、22年に行われています。見ていただきますと、平成7年と平成22年でほとんど変わらず、方言と共通語は、相手や場面によって使い分ければよいと考えている。つまり、この人たちがそのように考えているということは、その能力を持っていると考えることができます。全体として平成7年で75%、22年で79%ですから、7割超、8割に近い人がこの能力を持っているということです。終わった問題でもよいと考えることもできます。ただ、ここは、このデータに基づいての説明はしませんが、実はこれは全国を平均した結果です。この使い分け派が主流とは言え、非常に地域差、年齢差が大きい問題であるということです。全体としては終わったように見えますが、今もって地域、年齢、もちろんそのほかの性とか学歴とか職業とか属性の違いが非常にあって、実はそれほど終わった問題でもないのではないかと。これがまた我々がコミュニケーションしていくときの一つのポイントになっていくのではないかと。といったところです。

地域差、年齢差が大きいということは、ごく近年の調査データでもたくさんあります。「生育地地域ブロック別の各群への所属確率」のデータは、私たちが2010年に行った、方言と共通語に関する言語意識の調査です。地元の方言や共通語が好きか嫌いとか、使い分けをしている意識があるとか、こんな相手に方言を使うか使わないかといったような、複数の方言と共通語に関する言語意識を使って、総合的に指標化してみたもので、人をグルーピングしてみました。北海道から沖縄まで地域ごとに並べ、それから、生育地が分からない、海外で生育したといった方のことを「その他・不明」として、北から南に並べてみました。

注目していただきたいのは、「クラス1」黒く示しているところです。これは、いつでもどこでも〇〇弁を、どんな場面でも方言を使うし、方言が好きと考える人たちのグループです。これは近畿が最も高いのは当然かといったところですが、黒い棒の高さ低さが相当違います。「クラス2」が、いつでもどこでも共通語と考えている、共通語話者というグループですが、首都圏に非常に多く出てきています。これも当然な結果と言えますが、相当出方が違います。細かいところは省略しますが、方言、共通語の問題というのは、今もって非常に地域差が大きい。そして、次のグラフは同じデータを、年齢で、どのようなグループに属しているのかを平滑化したグラフで示していますが、大体見てもらえばいいのですが、要するに年齢によって違うということです。例えば、先ほどお話しした、いつでもどこでも方言タイプというのは、もとも

と最大多数派ですが、大体調査当時 60 歳ぐらいから 40 歳よりちょっと若い、つまり団塊から団塊ジュニアの間にぐっと増えています。逆に共通語話者は増えていそうですが、ここのところは特異であります、下がってきています。つまり、考え方は、それがみんな共通語化しているから、地域差、年齢差といったことが余りないだろうといったことを、いろいろな意味で裏切られる結果になっています。

これは我々だけの結果ではなくて、例えばNHKでは、全国県民意識調査といったことを、70年代の終わりと90年代の半ばに行っています。90年代の報告のところを見てみると、表1としてお示ししているのは、47の都道府県における差の非常に大きかったもののベスト10です。見ていただきますと、やはり県民気質とか、それから意識とか、土地の言葉に対しては極めて振り幅の大きい問題であるといったことが分かります。これに限らず、共通語と方言に関する、実態もそうですが、実態と連動する意識というのは、どんな調査においても極めて属性差が大きいトピックです。ということ踏まえると、みんなが共通語を使えるようになったから何となく終わった問題化しています。確かにその点では、ある種終わった問題かもしれませんが、終わった問題とは言えないのではないかと、最初に問題提起したいことです。

「アウトライン」です。「1. 「国語に関する世論調査」における「方言」」は、今お話しした「国語に関する世論調査」から見た方言といったことです。その後、「2. 「方言」の価値の変遷」、「3. 拡張する「方言」の用法」、「4. 災害と「方言」」では、災害の方言といった例を少し見て、「5. 国語施策と「方言」」といったこと、最後に関連の文献をお話したいと思います。

さて、「2. 「方言」の価値の変遷」について申し上げたいと思います。まず、日本は近代国家となり、標準語政策を取り入れることによって、近代化を押し進めてきました。つまり、標準語政策、裏を返せば方言撲滅、これは対内的。対外的には、植民地に対して方言、日本語、国語教育を押し付けていくといった、そういう時代でした。戦争が終わり、高度経済成長が終わる。このぐらいのところまでが、方言—多様性の象徴である方言といったことが「stigma」であると思込まされてきた時代と言えます。しかし、それ以前は多くの人にとってみれば、方言はモノリンガルの世界だったわけです。方言がモノリンガルの世界が終わりを告げたときに、大きく日本語社会の中における方言に対する価値が変わってきます。

その転換点を迎えるのが80年代です。80年代までには、戦前からの軍隊における教育、学校における教育、ラジオ、そして1953年に本放送が始まったテレビにおける共通語の拡散といったことがあいまって、共通語化が進みます。つまり、1960年代生まれというのは、大体生まれたときから家にテレビがある世代で、おおむねその世代が共通語能力を獲得した世代となり、その世代が青年期を迎えるのが1980年代です。ここで価値観が変わってきます。つまり、共通語は目指すべきターゲット言語であった1970年代までと様相を異にし、誰でも使える普通の言葉になって、むしろ方言といったものが誰でも使えるわけではない、特別の言葉に転倒していきました。1980年代になると、先ほどの方言と共通語を使い分けることができると思う人が増えてくる。方言が「style」、場面によって方言を使うのか、共通語を使うのかといった時代を迎えます。こうなると、むしろ首都圏辺りの人はなまりがなくていいねと言われてうらやましがられる存在でしたが、これが逆転します。自分たちはそれ以外の特別な言葉を持っていない残念な人といった気持ちが、1980年代の若年層に芽生えてきます。

方言がスタイルになってくると、みんなが共通語能力を持つようになってくると、当然ながら伝統的な方言は弱化していきます。希釈化してくるし、伝統的なり言などは次々失われていく。これは社会の在り方が変わるといったこともあるわけですが。そうすると、方言がある人がうらやましいといったような心が芽生えてくるのと同様に、方言が文化財化してきます。実際には1960年代ぐらいから、全国における方言ア

アーカイブ事業といったことが国家規模でいろいろ行われています。そのアーカイブ事業がまとまり、世間に示されるようになるのが80年代の終わりから90年代です。90年は、方言は弱化し、方言の価値は上がる、そして学術的な価値を持つようになるといったことで、方言回帰、再評価の時代となるわけです。

次に、実は学術的価値も付いた、情的価値も持っているところに加えて、インターネットが入ることにより、「打ち言葉」といったものが顕在化してきます。この「打ち言葉」は、先ほど福田委員の御発表にもあったように、パラ言語や非言語行動といったところが落ちるもの、つまり感情のやり取りに示すものが落ちますが、パーソナルなコミュニケーション、親密なコミュニケーションをするときにそれが欲しい。そういうことを補填するために、例えば絵文字とか記号とか、そして方言とかいったことを、自分の気持ちを表すために使うことが出てくるわけです。ですから、方言に様々な価値が付け加わっていく上で、方言で自分の気分を表現することが表に見えるようになってきた時代と言っていいわけです。そして、2000年代以降が、今我々が見ている「方言「prestige」の時代」を迎えたといったことになるわけです。

これをどのように見ていくのか。いろいろな形で見えていくことができますが、今日は短い時間でお示しします。「読売新聞（ヨミダス歴史館）、朝日新聞（聞蔵Ⅱ）「方言」記事数の推移」を御覧ください。このグラフは、読売新聞の記事、朝日新聞の記事、それぞれの全文検索ができるヨミダス歴史観、聞蔵Ⅱの中における、全文検索ができるようになった1989年以降、2015年12月31日までの「方言」を含む記事数の推移を示しています。この前のところもデータはありますが、全文検索はできなく、キーワードが付いているだけなので、社によって方針が違うとか、キーワードが付いているけれども、余り方言とは関係ないところがあるので、そこのところは割愛しました。ずっと100以下を推移していて、どんと上がるわけです。これは、新聞の紙面が増えたから、新聞の記事が増えたからじゃないかということもありますが、平成期に入ってから、大体似たように見えていいのかと思います。実線が読売、破線が朝日ですが、おおむね同じ動きをしているといったことに御注目ください。

また、ブルーで示したところ、1995年がインターネット元年と呼ばれているところですが、ネット普及期にぐいぐい伸びてきていることが、一つ見て取れます。そして、2005年から2006年というのは、女子高生方言ブームと呼ばれた時期ですが、方言ブーム期でした。そこで読売はピークを迎えて、朝日はちょっと後にピークを迎えていることが分かります。それから後、少し下がりましたが、ぐいぐい上がった前の水準には戻っていません。方言をトピックとして扱う、つまり社会の中において方言が関心を持って受け入れられて、新聞記事になるといったことにおいて、それを関心と読み替えるならば、定着期になっているのだらうと捉えられます。

もう一つ。線を入れた、2011年3月には東日本大震災が、未曾有の災害が起きました。この後、やや持ち直しています。これは災害と方言のところで、少しお話を申し上げたいところになります。

わざわざネット普及期を入れたのは、先ほどの2005、2006年の女子高生方言ブームと言われているところでは、従来の方言時点とは全く違う、かわいい方言本といったものが次から次に刊行され、たくさん売れました。今はほとんど絶版になっています。見ていただければ分かるように、これは一応都道府県別とか、あるいはこういう場面だったらこういう方言を使うといいよといった内容になっています。ギャルっぽい風情の若い女子が表紙にきていて、「THE HOUGEN BOOK」と書かれていたり、それから「ちかっぱめんこい方言練習帳」。「ちかっぱ」というのが九州方言、「めんこい」というのは東北方言ですから、既にここでごちゃまぜ方言になっている。「めっさいける方言の本」とか、「かわいい方言使っちゃおう」とか、一番右は「使える方言あそび」になっていますから、方言がもう遊びに使われる。自分たちの気分を表す楽

しいものといったところに到達して、これはインターネットに非常に関わっているということになります。

方言は、従来の在来の土地の言葉、つまり、ローカリティーといったことと強く結び付いたものとは異なる用法が生まれているということが分かります。ここで、方言は元々は生活の中の言葉で、いわゆる素の方言だと言いました。ここをまとめておきたいと思います。

つまり、素の方言といったものと、素ではない、再提示された方言といったところで、ここは水準を開けておきたいと思います。生活の中の素の方言といったところ、つまり現実の土地と結び付いた、生活の言葉としての在来の土地の言葉としては、「リアル方言」と呼んでおきたいと思います。これは無編集・無加工の素の方言といったことです。それに対して、先ほどお話ししたようなことが出てくる背景には、「バーチャル方言」といった概念が導入されてきたのではないかと私は考えています。バーチャル方言というのは、リアルな生活の方言ではなく、再提示されたもの、つまり、再提示するとき、意識しているか、していないかはともかくとして、リアル方言を編集・加工したものであるといったことです。明らかに言語社会、すごくリアルに近いものもあるし、ものすごくリアルから遠いものもあるけれども、言語社会で共有される、いわゆる本物の方言、リアル方言とは異なる水準にある方言であるといったことです。編集・加工は意識的とは限らない。例えば、「私、〇〇出身なんです。」といった話をしたとき、「じゃあ〇〇方言話してみて。」と言われて、再提示する方言、そこは実際に使われているリアルな方言ではなく、聞き手に対して、よりその地域らしさが分かりやすい編集・加工、あるいはその地域らしさというのをより強調するための編集・加工が施されています。意識しているか、していないかといったことは、かなり個人差によるものになるわけです。

また、方言は、元々在来の土地の言葉ですから、土地との結び付きが強いものだったわけですが、先ほどの「めっさいける」もそうですが、「ちかっぱめんこい方言練習帳！」などを見ていただくと分かるように、現実の土地との結び付きが後退化するといったケースも多々あるといったことです。

こう見てくると、リアル方言もそうかもしれませんが、バーチャル方言は、少なくとも大きく二つの用法がある。つまり、元々の地域方言が持っている地域性といったことを前景化させた地域用法といったものと、そうではなく、そういった地域性といったものをぐっと後退化する、あるいは否定されたこともあるキャラ用法といったものがありそうだということです。

「ヴァーチャル方言の用法」スライドを御覧ください。地域用法としては、まず在来の土地との結び付きが前景化していますが、ここでも、元々は（a）しかありません。話者の地域性を喚起する用法です。キャラを有するときには、またちょっと違いますが。（b）では、その発信者はどうでもよくて、そのときの話題の地域性を喚起するための用法といったことです。そして、全く新しい、地域から切り離された用法としてのキャラ用法。これは在来との土地の結び付きが後退化して、バーチャル方言と結び付いた、方言ステレオタイプといったものが前景化した用法。つまり、そのときの「話題」とここに書いていますが、場とか話題にふさわしいキャラを喚起する用法といったことです。

こう考えると、地域用法は実はかなり方言の尻尾が残っていて、ローカルアイデンティティーとローカリティーの提示といったことで使われるものですし、キャラ用法というのは、そのときの自分の気分、場、内容にふさわしい気分を表すものだということになります。つまり、こう見ていくと、地域用法の（b）、そしてキャラ用法といったことが、従来の方言の用法としてはなかった用法になります。

また、方言ステレオタイプといったことを申し上げました。例えば、大阪とか大阪

方言といったとき、あるいは関西、關西方言といったときに、それぞれ各委員の頭の中にあるイメージなりキャラクターなりが浮かぶと思います。そんなことだと思っていただければいいのですが、方言ステレオタイプは、いろいろなものの複合体だと考えられています。

一つは、〇〇方言といったら、ある特定の単語とか言い回しがぱっと浮かぶ。例えば、「何でやねん」と浮かぶとか。二つ目は、方言に対して抱くイメージ、面白いとか明るいとか怖いとか。三つ目は、話者、その方言を使っている話者に対するイメージ。例えば、大阪出身であるという、何か面白いことを言っていると困るといったエピソードはよく聞きます。四つ目、今度は、そういうこととは関係なく、その土地に対するイメージです。例えば、北海道方言は、移民の地域の方言ですから、北海道オリジナルといったものはたくさんあるわけではありませんが、北海道方言、何となくのんびりしていて穏やかで、心が温かだといったような、そんなイメージ。これは地域の「でっかいどう北海道」といったイメージになるわけです。こういったことの複合体が、方言ステレオタイプになります。

上方、関西、大阪については、既に研究がいろいろ進んでいます。例えば金水敏(2003)などを御覧いただければいいわけですが、そのほかの地域についても、非常に強固な結び付きを持っているイメージと地域といったものが存在します。これは調査年とか調査方法とかが違ってても大枠一緒です。だからこそステレオタイプなのですが。これは私が言っている、方言ステレオタイプ、「キブン」といったことと関わってきます。

では、「打ち言葉」の中で、これがどのようにさっきの(a)、(b)、それからキャラ用法としてどのように使われているのかを見ていきます。

まず、「(a)話者のローカリティー提示」のスライドです。これは最も地域方言らしい使い方になります。「ぜよ」という高知方言らしいもので検索をかけてヒットしてきたものを見ています。これは発信者が形式から想定される地域に、一応住んでいることになっています。そして、青くしたところが「ぜよ」以外の高知方言と想定される形式です。かなりたくさん入っていますから、文体のベースとしては、共通語ベースの文体とは言えないものになっています。

次に、「(b)話題のローカリティー提示」のスライドです。これもやはり「ぜよ」と検索して引っ掛かってきたものですが、これは女性、神奈川県の人が書いていますので、発信者の居住地とは関連しません。それから、当該形式が喚起する、特定地域に関連したトピックを述べているので「ぜよ」が選択されています。「高知土産ぜよ」と言っているわけです。文体を見てみると、実は「ぜよ」というところを除くと、方言形式といったことは見ることはできない。つまり、この話題にふさわしい形式として、この人は選択をしているということが分かります。

そして、「(c)方言ステレオタイプと結びついた臨時的キャラの発動」のスライドです。これも「ぜよ」で検索した結果ですが、これは千葉県の男性。したがって、やはり発信者も地域とは関係しません。話題も、土佐とか高知とは何も関係ありません。実はこのブログは、サバイバルゲームについて述べているところです。最後のところで、「もうやるしかないぜよ」といったこと、つまりもうやるしかないという男気キャラを発動するような気持ちで「ぜよ」が選択されているということです。

今、「ぜよ」だけで見ましたが、これは多少古いのですが、2013年3月にgooブログ検索で、日本語で書かれている2006年1月1日から調査日までの全ブログを対象に方言文末表現でフレーズ検索した結果になります。今見たのは、(a)(b)(c)それぞれの具体例として見ていただきました。大分違うということは感じていただけたと思いますが、それ以前に、いろいろな属性についての結果を、当時のgooブログ検索は評判分析だったと思いますが、ほかの形のものも見ましたが、「ぜよ」は期待としては、高知に関係のある人といったものに多く出ると、すごく従来の地域方言に

近いわけですが。ところがそうではなく、「ぜよ」が平均的なブログ執筆者の他の属性の中で、目立った数量を示しているところはなかった。「ぜよ」を使っている上位を並べてみるとどういふ並びになるのかというと、結局のところ、ネット利用者数と共変する。つまり、使っている人が多ければ多いほど、「ぜよ」が出るといったことになりました。地域や性や、若干年齢は関係しますが、ほぼ関係ない。つまり、土地と結び付いたことではないということになるわけです。ただし、方言の用法については、前段のとおり3タイプ認められるわけですから、「(a)話者のローカリティー提示」の機能というのは、発信者と在来の土地との結び付き、つまり従来の意味での地域方言といった性質を強く残しているわけです。

このようなことを見ていくと、方言は、その人がどこの地域の人であるのかといったことを示す用法だけではなく、様々な用法が拡張しているといったことが分かるわけです。しかし、オリジンとしては、リアル方言としての在来の土地の言葉というものがあつた、これが進展してきた、つまり、バーチャル方言として日本語社会の中で共有されることによっていろいろ出てきた。一番近いところとしては、バーチャル方言としての、さっきの地元キャラを発動するといった話者のローカリティー提示の用法。そして、バーチャル方言としての、人は関係のない、「(b)話題のローカリティー提示」といった用法。さらに遠くいって、地域性というものは後退化した、バーチャル方言としてのキャラ用法。これはつまり、「キブン」の表現になるわけです。つまり、オリジンに近ければ近いほど、土地との結び付きの程度は高く、(c)に行けば行くほど、土地との結び付きの程度が下がってくるということです。

先ほど見たこういう用法が、ブログという個人が好き勝手に書いているところだから出てくるというわけではありません。例えば災害が起こったときに、方言が実に多彩な使われ方をしている。ここで例を見ていきたいと思つた。「4. 災害と方言」です。この中にもこれまでの出た方言の用法がいろいろあるということです。

まず災害が起こったときに、今回の熊本地震の中でも、各社が報じていましたが、家族と地元のちゅう帯としてLINEをやり取りしているということが、いろいろな形で記事化されていきました。つまり、家族、地元といったちゅう帯としての方言。SNSのコミュニケーションで多用されていて、これはとてもオリジンに近い使い方になります。

そして、夕刊フジから引用してきましたが、東日本大震災のときにも同じようなことがありましたが、自衛隊が救援に入ったときに、ヘルメットに「がんばるばい！熊本」と入れていく。その土地の言葉で応援メッセージを送ることで、シンパシーを与えるような形を示しているといったことです。

また、いろいろな漫画家が、自身のSNSで様々な意思表示をしました。一つは、ちばてつやのブログ。これは多く報じられたものになります。 「くまモン描きました。」と、くまモンの周りに「みんなそばにおるたい」と言っています。「たい」という九州方言らしい文末表現にして、同意、シンパシーを示しています。

これは最近、8月24日に男子バスケットボールのB.Leagueが、チャリティーマッチをして熊本を応援するチャリティー、「がんばるばい熊本」、やはり「ばい熊本」となっています。

それから非常に早い段階から、東京女子大学の篠崎晃一先生のゼミがジャパンナレッジ経由で実施しているものですが、方言でエールを送るといったことで、これは俚言りごんを使って、「がまだせ！熊本」応援方言リレーをやっています。

また、これも東日本大震災のときに始まったものです。福岡女学院大学の二階堂整先生が立ち上げられているもので、被災された方々がやってきて、例えば医療行為なり福祉行為をするときに、その方言を知らないとなつた活動できない。そのことに対する

支援をするものです。

また、東北大学の方言センターでは、支援者のための知っておきたい熊本方言といったサイトを立ち上げています。ここでは「がんばっぺ熊本！！」「負けねっちゃ大分！！」と、今度は東北の自分たちの方言で相手に対してエールを送ることをやっています。つまり、実に多様な形で方言が、寄り添うメッセージ、ちゅう帯のメッセージといったことで選択されています。

災害と方言研究者の活動は、文化庁の支援を受けているものもたくさんありますが、活発に行われていて、この後開催される方言研究会でも 50 周年記念シンポジウムで「方言を介した地域支援活動」といったことが行われています。

では最後に、「5. 国語施策と「方言」」を見ていきます。文化庁の委託事業と方言については、外からの刺激によって、今活発に行われているものとして御紹介した、危機的な状況にある言語・方言関連事業があります。もう一つは、これと連動させて、被災地における方言について。人がいなくなるといったようなこと、皆さん生活で大変であるといったようなこと、そこのところの方言がなくなるといったことと連動させて、東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業が、現在走っています。

もう一つ。教科としての国語科の中において、方言がどのように位置付けられているか。大きくは最初にお話しした審議会での話と重なるわけですが、これは一番新しいものですが、次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめに出ているものです。注目していただきたいのは、方言が伝統文化とか、それから伝統文化である言語文化を継承・発展させるといったところに位置付けられているということです。つまり方言というのは、伝統文化への愛着、継承・発展といった位置付けに収まっていることになります。

しかし、実はそれだけではないということは、ここまでお話ししてきたとおりです。では、国語施策と方言として、現行走っているものは、リアル方言の調査・アーカイブ化・継承事業というものです。これは危機言語を中心としたもので、継続的な支援が期待されます。ただし、危機言語は、危機言語化しているとユネスコで指定されたところだけに限りません。これは地域が、例えば最も危機なのは、東京方言と言ってもいいわけですが、これは支援の対象にはならないこと。それから、伝統的なことということだけではなくて、常に新しい方言といった、言語変化もいろいろありますので、それらにも支援があるとうれしいと思います。例えば、地域とか変化とかといったことで言うと、首都圏の言語の実態と動向に関する研究といったことがサイトでまとめられていますが、この中では、実に多様で、今も変わっていて、そしてかつ危ないといったことがいろいろ分かってきます。

次に、これが、私が方言がいろいろな表現を展開してきたと言ったことに関わるのですが、方言は土地との結び付きだけではなくて、多様な表現リソースになっています。それについて、日本語社会において、どうなっているのかといったことについての調査分析も必要だろうと考えています。これは、この地域方言がこういう多彩なリソースになっているというのは、実は世界的に見てかなりユニークだといったことが、いろいろな各国の方言研究者、言語研究者とお話することによって、かなり意識するようになりました。

これはどんなことができるのか。背景等のコンテンツ類とか、言語意識の調査分析とか、書き言葉、話し言葉に加えて「打ち言葉」、コミュニケーションにおける実態と言語意識の調査分析などといったことです。ただし、こういった多様な方言コミュニケーションを取り上げ、かくあるべき姿を模索、あるいは提示する対象とすることについては、やっぱりなじまないのではないかと思います。つまり、これが先ほど最初に申し上げた、パーソナルあるいは、ソーシャルな場におけるパーソナルな表現と

いったことになるわけです。

また、ユニークだと言ったのはどういうことか、簡単に申し上げると、方言というのは地域方言と社会方言に分かれると仮定するとしたら、実は日本語社会というのは、地域に基づく差異というのはかなり前景化していて、しかもその地域が日本語社会に暮らす上で相当広く共有されています。例えば、九州といたら、さっきの「ばい」とか「たい」とかいったようなことは大体すらっと浮かぶし、「おいどん〇〇〇でござわす」と言ったら「西郷どんだな」と共有されるという、これはそんなに一般的なことではないのです。例えば、欧米の場合には、こういった地域性は後退して、移民の国ですし、移民もたくさん受け入れているので、社会的属性に基づく差異が前景化していて、地域差が、こういったリソース化していない、あるいは極めてリソース化しにくい社会になっています。こうした部分が日本語社会のちょっとユニークなところになるわけです。例えば、これはいろいろなゲーム、アニメ、戦隊物、あるいは最近ではアイドルもそうですが、地域方言をリソースとした自己装い表現といったことが実に多彩に行われていて、これは結構ユニークだということになります。

文献の一覧は、こういった方言の現在を知ることができるものを挙げておきました。これでも足りないところではありますが、こういったところになっております。

○沖森主査

ありがとうございました。それでは、田中委員による御発表について、質問をお受けします。質問がございましたら、挙手をお願いします。（→ 挙手なし。）

では、直接の質問はないということですので、本日のお二人の御発表を基に、コミュニケーションの在り方、言葉遣いの問題について、今後どのような枠組みで考えていくべきか、あるいは取り上げるべきかといったような、具体的な問題について自由に御発言いただければと思います。どうぞ、御自由に御発言いただければと思います。お二人の本日の発表の質問でもかまいません。お願いします。

○川瀬委員

方言は、どんな形であれ少し入れてもいいのではという気がしてきました。もちろん文化庁が出すまとめの中で、コミュニケーションを考えるのであれば、それはいわゆる標準語、共通語とされるものをベースとするのだと思います。ただ、コミュニケーションが相手とのより良い関係を考えていくのだとしたら、やはりシンパシーということは外せない問題だと思います。そうすると、ローカリティーとしてもそうでしょうし、相手への励ましだったり、思いやりだったり、自分の心底からの気持ちを表現するために、方言が有効な手段になり得るとするのは、何らか本線の中に入るのか、また新聞でいうとコラム的な部分になるのか分かりませんが、何らか一つ言及したいコミュニケーションのような気がします。

○関根委員

福田委員の御発表の、受信者に関する知識のところの、年齢とか社会的地位を配慮するところの部分に、相手がどういう地域の出身であるとか、どういう方言を話しているのかということが、一つここに入ってくるのは、どうでしょうか。

○福田委員

そのとおりだと思います。

○田中委員

例えば典型的には災害の場といったことを想像しておっしゃったのだと思います

が、そうだと思います。

また、NHKでは、1970年代からいろいろ議論されてきたように、放送の中に方言をどのように取り入れていくのか、どのようにすべきなのかといった議論はあってもいいのかとは思いますが。ただ、コミュニケーションを、メディアにおける、メディアも含めてのコミュニケーションと考えるかどうかといったところは、よく分からないと思ったので、格段触れなかったところです。

○石黒委員

まず一つ、お二人のお話を伺っていて、福田委員の中で世界を共有するということが非常に重要とされていて、でも、方言はある意味で世界を共有するのに、同じ背景を持っている、似たような背景を持っている場合、その時点で既に有利だということがあるだろうと思います。そしてまた、今のお話を伺いながら思ったのは、本来パラ言語は、要するに単純に言ってしまうと、文字にしたときに消えてしまうような情報、例えば、アクセントとか、普通、音声で話していると、「ああ、この人何歳ぐらいかな」とか、「この人はどこ出身かな」といったことが分かる、語彙はいわゆる共通語的な語彙の選択であっても、アクセントで、「ああ、この人は西の人だ」とか分かったりするわけですねーそういう部分がどうしても書き言葉になると捨象されてしまいますが、そういうものもまた「打ち言葉」の中で表されてくる。

私たちがコミュニケーションしようとするときに、興味があるのは相手の顔です。顔が見えるコミュニケーション、例えば、文字であってもそれはそれで、あとは人柄とかもあるのかもしれませんが、普通だと社会的には「えっ」と思うようなメールも、この人だったら許せるということもあります。それはなぜかということもありますので、やはり個性とか顔とかいったことで、何も画一化されたコミュニケーション観が全てではないということを表す意味でも、どんな形でそれを取り入れられるのかと思って伺っていました。もし田中委員に何かそういうお考えがあれば、お聞かせいただきたいと思います。

○田中委員

福田委員の御発表の最中にも、顔が見える／見えないといったことを考えていました。それは福田委員がおっしゃっているコミュニケーション、コミュニケーション能力とは、「打ち言葉」も含めて、その人がどういう人であるか同定されるという、言わば広義の意味での顔の見えるコミュニケーションといったことだろうと思います。

一方、私は、実はコミュニケーションには、打っているけれども顔は見せないでフェイクしている、顔を見せないようにする、あるいは顔を見せないコミュニケーションというのがあって、そこはらち外だろうと思います。つまり、そこはコントロールのしようがないわけです。例えば、よく言われるように、普通に対していとなかなか良い人だけれども、その人がネットで書いている内容を見たら驚いてしまうということがあります。つまり、ネット人格みたいなことで、それはその人のリアルと思っている顔を知っているから感じるものだけれども、でも、その顔も、広義の、顔の見えない人とのコミュニケーションについてはらち外です。らち外にするしかないなぐらいしか考えていませんでした。

○関根委員

共有した世界を構築するということの、共有した世界というところが気になります。私の理解が足りないのかもしれませんが、何かコミュニケーションというのは、世界を共有しないといけないのか、つまり、共有していない別々の世界同士で意思疎通ができるという、そういうことが大事なのではないかという気がします。どこまで

パーソナルなものに踏み込んでいくかというのもまた別の問題としてあるかもしれませんが、共有すると、すぐパーソナルな部分にまで行ってしまいます。

世界観と言い換えると、御趣旨と違ってしまうのかもしれませんが、世界観が異なる者同士でも、何とか意思疎通をする。つまり、こうあるべきという世界を入れてしまうと、あるべき姿がどうしても付いてきますが、世界が違う、世界観がそもそも違う者同士でも、意思疎通ができるコミュニケーションというものを目指したらどうなのかと。ちょっとこれは漠然としていますが。

先ほど医師と患者のやり取りを指摘していましたが、私は以前、国語研で病院の言葉の委員会に参加していました。いろいろインタビューもしましたが、それだと、何も知らない、知識のない患者の方にだけ寄り添っては、治療に行き着きません。やはり医学知識、医療の用語はそもそもが複雑で難解です。つまり、患者の側もある程度知識を知るといような誘導をしていかないといけない。だから、このことは思うほど単純じゃないということは思いました。

○福田委員

例えば、「共有されていない世界」のスライドを見ていただくと分かるように、彼女と彼は全く違ったそれぞれの記憶を持っているし、違った考えを持っているし、この二人がうまく同じパンのことを思い出して、そのときの思い出を共有できれば、それは共有された世界と言えらると思います。感情だけではなく、情報ももちろん共有しなければ、伝え合うということはできないのかなと思っています。例えば、医学用語で言うと、「潰瘍」とか何か難しい言葉がありますが、その単語自体を患者さんが知ることはいいことだと思いますが、全然知らない人に、いきなり「あなたはここに潰瘍ができていてこうだから、どうのこうの」というのではなくて、「潰瘍というのは、内部組織がただれているんですよ」と言うような、その一言を入れるだけでもかなり違ってくるのかと思っています。

そう考えると、コミュニケーション能力というのは、最後のスライドに出しましたが、先ほど塩田委員からも御指摘ありましたが、能力そのものとは、どうやって情報を共有していくのか、どうやって世界を共有していくのかということだけですが、そのときにそこだけを特化してしまうと、より良いコミュニケーションはできません。やはりこちらの他者に配慮した伝え方、正に田中委員の、災害における方言を使用しあげるときっとうれしいうらやうという、他者への配慮があると、熊本方言は何なのかな、大分方言は何なのかなと、そうやって知識、語彙力なども増えていく。こういう相互作用が正の方向に起こっていくと考えていて、全く一緒になるということは考えてはいません。

○山元委員

今の話題に関して、共有という言葉を使うかどうかということで申し上げますと、コミュニケーション能力というのは、何か情報や感情を共有するというものに加えて、共創、共に創るといった考え方もできるのではないのでしょうか。やり取りの中で何かが生まれていたり、生み出す力といいますか、組織を動かしたりとか、人間関係を作るとか、そういった場面もコミュニケーション能力の中に入れるという考え方もできるのではないかと思います。聞きながら聞かせていただきました。

教育界では、共創的という、共に創る、クリエイティブもそうですが、よく使いますが、ほかの領域でどうかはよく分かりませんが、そういった考えはいかがでしょうかというのを提案します。

○福田委員

新しく創っていくという。

○山元委員

そうです，二人のやり取りの中で創るという。

○福田委員

先ほどの書き言葉のところで，物語のスライドを出しましたが，これでは多分作者が思い始めた，作者がこういうふうに作ろうと思っていたことと，読み手が作り上げたものは多分かなり違ってくると思います。そういう意味では，共創というのもあり得るかとは思いますが。

○塩田委員

「共有した世界」という，この「世界」という言葉が，やはりこの小委員会の中で共有されていない気がします。

どういうことかと言うと，私の中で「世界」というのは，体系的な，システムチックな，閉じた体系としての，完成した一つの統一体であります。ですが，お話を伺っていると，これを「共有した部分」などにすれば，多分そんなに誤解はないと思います。「世界」というと，例えば先ほどの四コマ漫画でいうと，余計な話として，彼女の方が，「いや，あのとき実はあのクリームパン，ちょっと砂糖が多くて食べたくなかったんだけど，あなたが買いたいと言ったから買ったのよ」とか，そういうことまで含めて完全共有ということを目指すことになってしまうと思います。ですが，私は良いコミュニケーションがもしあるとしたら，そんなことまでは別にもう伝えなくていいというか，些末なことはもういい。ただ，そういう部分として共通している，共有している部分があればいいのではないかなと思いました。

○田中委員

言わなくていいことは言わないという感じでしょうか。

○山田委員

福田委員の，コミュニケーション能力とはというところで，私も気になりました。他者と全ての時間軸における共有した世界を構築するための道具，道具としての話言葉とか書き言葉とおっしゃっていますが，最初の頃からいろいろ出てきていたのですが，コミュニケーションというのは，一つは対面型，それからもう一つは非対面型です。

文芸の作者の立場からすると，やはり非対面型のコミュニケーションを目指しているわけです。こういうことを表現したい，こういうことを言いたいというものを，読み手がどう受け取るのかは，私には全く分からないわけです。分かりませんが，やはりそれは，コミュニケーションの能力のところで，他者あるいは客体化した自己と共有した世界，こうなるわけですね。どちらかと言えば，私が何かものを書く場合。一つの文芸作品，私は現代詩ですが，それを書くときには，やはり自分の中で対話をしているわけです。だから，そういった対話の仕方もあるということはどう捉えていくのか，ということを考えていくべきかと思いました。

もう一つ，対面型のコミュニケーションの場合。私の仕事の関係で言いますと，長く，山谷地区の住民の方たちと生活相談だとか，そういうことをやっていました。私は公務員でしたから，公務員という立場で相手に分かるように説明をしたりするわけですが，そこで丁寧な話をすると，なかなか分かってもらえないわけです。そののと

ころは相手の立場というか、その方の生活の状態だとか、そういったところを配慮しながら、話し方も少し変わってくるということもありました。そうしないと、どうして困っているのか、じゃあこちらとして何ができるのかというようなことがなかなか通じていかないこともありました。やはりそういったコミュニケーション、対面型のコミュニケーションをするときでも、相手の立場だとか、そういうところを考えていけないといけないと強く思っています。

○田中委員

これを言ったら身もふたもないと思って迷っていたのですが、今の山田委員の山谷地区のお話を伺って思ったのは、要するにコミュニケーションの在り方を考える際、場面別の社会的なテンプレートを作ることを私たちは期待されているのだろうということです。というのは、山谷地区であれば、いわゆる会社などで使う言葉とは異なるわけです。

大きく当たり障りのない社会的テンプレートを作り、それとは別に、カスタマイズとかパーソナライズしていく、創作能力というようなことは別に用意しましょうといった話をするしかないのかと思っています。したがって、私はソーシャルなのか、そうじゃないのかといったことをお伝えしていたわけです。やはり私たちは場面別、社会的テンプレートみたいなものを作ることを期待されているのでしょうか。

○沖森主査

まだまだ御意見があるかと思いますが、これで意見交換を打ち切りたいと思います。言い足りないこと、あるいは後でお気付きの点がありましたら、事務局までメール、もしくはファクスなどでお伝えいただければ幸いです。

本日、御発表くださいました福田委員、田中委員には改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。また、意見交換については、今後も事務局と相談をして、意見発表をお願いさせていただくことになるかと思っています。また、意見発表を御希望される委員の方がいらっしゃれば、事務局まで御連絡いただきたいと思います。

では最後に、事務局から連絡事項があればお願いします。

○鈴木国語調査官

参考資料3についてです。2月におまとめいただいた「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」において、調べたい漢字について検索できるよう、9月5日に文化庁のウェブページで代表音訓索引を公開しました。そのことを御紹介しているものです。どうしても文化庁のウェブページは制約が多く、なかなか皆様がイメージしているものには至っていないとは思いますが、実際御利用いただいて、お気付きの点があればお知らせいただければと思います。

○沖森主査

以上で本日の国語課題小委員会を終了いたします。御出席くださり、誠にありがとうございました。